

# 就学年齡は低下してよいか

津 守 真



いま、幼稚園に通っている三歳児、四歳児、五歳児の成長をみてみよう。三歳児は体も小さく、母親から離れると不安げである。先生が一人ひとりの子どもに目をかけ、一人ひとりに話しかけ、子どもと親密な関係をつくっていくことによってはじめて三歳児の集団は安定する。先生が見えなくなると、三歳児は先生をさがして、先生のいくところにぞろぞろくっついてあるく。友だちといっしょの場所においても、ひとりで遊んでいる場合も多い。友だちと共通の目標をもって協力することはむずかしいのである。四歳児も、四歳ではじめて幼稚園にはいった子どもは、当初は三歳児と同様である。先生と、子ども一人ひとりの結びつきは強

く、二、三人、数人の子どもの中のグループの中で親しく子どもにふれていくことによってはじめて先生の感化は子どもに及んでいく。二、三人の友だちのグループができて、友だち遊びがさかんになるが、その遊びは次から次へと変化していく。このことは三歳でも五歳でもある程度共通のことであるが、幼児期の子どもの遊びは、そのさきがどのようになっていくのか予測がむずかしい。幼児の活動は、おとなの常識をこえて、予想外のところのびていく。幼児の考え方は、型にしばられず、着眼するところも、新鮮である。それだから、たとえば四歳児の製作品は、でき上りはまとまりがわるく、手ぎわもよくないが、創造性の芽ばえをみることができる。

五歳児は、すでに適切な幼稚園の経験をつんでいれば、自分た

ちで活動をすすめることができる。朝、幼稚園に登園してきた子どもたちは、身支度をすませると、自分たちで遊びはじめる。昨日のつづきのごっこあそび、戸外のリレー競争など、数人から十人くらいの子どもたちが、自分たちで役割をきめ、人数が合わないときにはどうするかというような紛争を自分たちで解決し、子どもの遊びの中に先生がはいる余地を見出すことができないこともしばしばである。五歳児の終りころには、子どもたちのグループの協同意識や役割意識はいっそう明瞭になり、先生が少し助力を与えれば、何日にもわたって共同で一つの物を作ったり、あるいは、役割をきめて、自分たちでせりふを考え、劇をすることもできる。

五歳児の活動には見通しができてきて、目標の実現のためにいろいろと考え、工夫する。時間がじゅうぶんに与えられれば、彼らは時間をかけてこつこつとためし、工夫するのである。おとなの目からみると、小さなひとつのことに、子どもが時間をかけて工夫した成果であることが多い。このような活動の中で、子どもの創造性が養われ、思考力が培われている。これは科学教育の基礎である。

適切な幼稚園の経験を、一年あるいは二年経て五才児になった子どもたちは、集団生活で協力する態度の基礎を、自分たちのグ

ループの遊びの生活の中で身につけ、創造的思考力の基礎を、自発的活動の中で学んでいる。

五歳児は、幼稚園生活の花が開くときともいえるような、幼児期の最盛期である。彼らは、友だちと遊び、物を使って遊ぶ生活の中で、いろいろの能力や知識を獲得していく。四歳、五歳を通して、幼児期の教育は、遊びを基本とするものであること、また、幼児の集団生活においては、指導者が幼児の感情生活を理解して扱うことが必須であること、これらの条件の中で、幼児期の能力が十分に花を開くものであることを指摘しておきたい。

集団生活の態度や創造的思考力は、小学校の一年生、二年生の年齢になると、いっそう発達し、協力集団活動の規模も大きくなり、製作活動なども、いっそう複雑なものになっていく。もしも幼稚園の活動のように、小学校でも小さなグループの集団活動を重視し、時間単位をもっと大きくして子どもがじっくりと一つのものにとりくむ余裕を与えることができるならば、この時期により多くのことを期待できるであろう。現状では、教科を中心にあまりに細分された生活形態であり、小学校低学年の学習能力を考えると、おとしられている場合が多いというのが私の見解である。

しかし、小学校一年生の年齢、すなわち、六歳児になれば、現

状のように、教科中心細分主義教育形態でも、それに適応して使いこなすだけの能力をもっているといってもよいのであろう。あるいは、別言すれば、小学校の低学年の教師の教育技術と、実践的知恵がこれを補って、与えられた枠の中で最善の道がとられてるのであろうと思う。六歳児は、五歳児に比して急激に体力も増加し、自己統制力も増している。いやなことがあっても、そのときはがまんしておいて、別のときに、自分の楽しみをみつけるという、自分で使いわけをする能力ができてくる。この能力は、六歳児でようやくできるくらいのものであることを注意しておきたい。

もしも、現状の小学校一年生の教科中心細分主義が、一年下にさがってきたらどうなるであろうか。それはまったく幼児期の発達の特性にふさわしくないといわねばならない。現状で六歳に耐えるものならば、五歳児にも耐えるはずだというのであろうか。教育方法、教育形態の面で、五歳児の現状を変更する必然性は全くないといわねばならない。もしも、五歳児に小学校の一年生の現状の生活をおろしてきて、幼児から遊びの生活を奪い、教科中心細分主義の枠の中に入れるならば、幼児期に伸びるべき能力の芽をかえってつみとってしまうのであろう。それは、これからまず

重要になってくる、科学教育の上にも重大な欠陥を残すものとなるであろう。このことを私は憂えるのである。

## 二

いま、就学年齢を引き下げた結果、五歳児を現状の小学校に入学させた場合の害について述べたのであるが、理想的に教育がなされたとした場合、集団教育は一般に何歳からなされたらよいかという問題について次に考えてみよう。

もとより、教育機能は生まれてすぐから始まるのであって、乳児には乳児期の教育があり、一歳児には一歳児の教育がある。しかし、乳幼児の初期には、その教育の場は原則的には家庭であり、教育者は母親である。子どもが友だちといっしょに遊びはじめ、定期的な友だちといっしょに遊ぶ場を設けることによって益するようになるはじめの年齢は、私は二歳であると思う。ただし、その場合は、時間も一、二時間という短時間で、週に一、二回、母親が見えるところにいるという条件をつけたい。人数も、七、八人程度でグループを形成し、保育者は二名必要である。この程度の規模で、内容が適切であるならば、二歳児の集団教育が普及することは、現代においては意義があると思う。三歳児は、二歳児の延長のようなものであって、小人数、短時間、内容的にもけ

つして高度になりすぎてはならず、三歳児に適した生活形態でなければならぬ。五歳児就学問題が出てくると、幼稚園の三歳児クラスが急に増加して、しかも、四、五歳児と同様の扱いがなされるのではないかということが心配である。二、三歳児の場合にはとくに、指導法が適切さを欠くときには、集団教育をすることがかえってマイナスになる。適切な指導をうけるならば、子どもにとって益するところ甚大であろう。

四歳児になると、一般的にみて、集団生活の効果は明瞭になってくるので、大多数の幼児が幼稚園に行くことは望ましいであろう。そして、四歳児、五歳児および、現在の小学校一年生を幼稚園で扱い、遊びを中心とした指導を行なうことは発達のみにみて適切であると思う。

外国で就学年齢が五歳である英国において、あるいは、幼稚園の五歳児が小学校に付設されているところの多い米国においては、小学校の低学年の教育形態は、日本と全く趣きを異にしている。そこでは小学校低学年の教育は、幼稚園にずっと近い。時間の単位も大きく、学習は個人差を重視した分団学習で、子どもの自発的な興味や活動が尊重される。これは、この時期の発達に適した方法であり、学習能率の上る方法と考えてよいであろう。幼稚園をそれに近づけて考えるのではなく、むしろ、小学校が幼稚

園を理解せねばならぬ点も多いのである。学齢低下の論議に伴って、幼稚園が小学校に近づく傾向が増大するならば、順逆でとうである。

幼児期および小学校低学年では、個人差も大きく、生まれ月による能力の差も大きい。このような個人差を包容できるような教育形態を必要としている。生まれ月がおそいもの、ある能力が低いものが、わるく評価されたり、とり残されたりするような教育は、この人生の出発点の教育においてはとくに、けつしてなされるはならないのである。どの子どもも、その能力のままに受け入れられ、自己の力を十分に發揮して誇りをもてるような教育でなければならぬ。

就学年齢が五歳に引き下げられたことを考えるとき、生まれ月の早い、すぐれた子どもは乗り切っていくとしても、半数の子どもはとり残されていくのではないか、それは人間形成の上で重要な欠陥を残すものになるであろうことを、この点でも私は憂えるのである。

### 三

幼稚園の必要性が現代のように切実になり、また従来よりもいっそう早期よりの教育が望まれるようになってきているのは、現代都

市社会の社会的要請があることを見逃してはならないと思う。以前だったならば、幼児は野原の草や土の上で、母親が仕事をすべ傍で遊んでいればよかつたし、子どもは自然の中で泥をこね、友だちと戯れる中で自然に教育されていた。しかし、現代の都市生活においては、三階、四階の公団住宅の限られた空間の中で、幼児は土にふれることもなく、走りまわる場もない。また、交通のはげしい道路のわきの商店街では、幼児は自分の場を見出すことができない。しかも、都市生活は、年々拡大しつつある。このような現代社会の中では、幼児の生活空間を確保する必要性が生ずる。幼児の成長に必要な自然環境をつくってやり、走ってもとび出しても安全な場所を確保してやるということ、以前ならばどこにもあった、このような場所を、とくに作ってやらなければ幼児の成長が保証できないという現代の社会条件の中に、幼稚園が普及しなければならぬ重要な要因があると思う。幼稚園は、人工化されつつある現代社会において、幼児が安心して十分に遊べるような場を作ってやるという機能を果たさなければならない。

#### 四

五歳児の就学年齢を引き下げるといふ論がなぜできてきたかといふことについては、いろいろの臆測があると思う。政治的なかけ

ひきや、小学校の教員の余剰対策などということが背景にあるとしたら、それは論外である。幼児教育というきわめて重要な問題が、そのようなことで左右されることが断じてないように、為政者、行政の立場にある方々に、申上げておきたい。

その上で、現在の就学年齢引き下げの論拠に、直接には二つの要因があるように思う。一つは発達加速の現象であり、他は、一般社会の要請である。

第一の点は最近の十数年は、児童の発達が以前と比べて一、二年早くなっているから、就学年齢も一年引き下げてよからうという考えである。身体発達からいえば、そのようなことがいえる面もある。しかし、精神発達全般に関していえば、幼児期における発達加速の現象は明瞭ではないといつてよいと思う。文字の習得などに関して、少し早くなっているかもしれないが、限られた側面について、半年くらい早くなっているという程度であろう。もしも詳細に調べることができるのであれば、逆に、能力として低下しているものもあるのではないかと思う。この点に関しては、結論的にいって、就学年齢を引き下げるほどの発達加速現象はないといつてよいと思う。

第二の点について、幼稚園に子どもを入園させたいのに、幼稚園が少なく、入園期になると親が不安を感じるというのは事実で

あろう。入園を希望する親が、安心して子どもを託することのできる幼稚園がもっと増加する必要があることはたしかである。その必要をみたすのに、就学年齢を引き下げるといふことは、どうしても必要なであろうか。国の援助のもとに、幼稚園を増設する対策をとることはできないのであろうか。

この二点からだけ考えると、学制改革をするほどの論点は出てこないように思うのであるが、もっと安全な他の方法が考えられないのであろうか。

現状の幼稚園は、一般に、けっして満足すべき状況でなく、幼児の発達に最適な条件を提供しているとはいい難いであろう。しかし、質的にも、量的にも、現代の幼児教育を向上させる方策は、他にもいろいろとあるであろう。一組の幼児数が多すぎるといふことは、自明のことである。この最低基準は何とかなければならない。

またこの分野で、教員養成が極度になおぎりにされていることは周知のことである。四年制大学の教員の養成の充実、幼児教育の専門家の育成、施設設備の改善等、実質的に手をつけねばならないことがたくさんある。それとびこして、一挙に就学年齢の低下を唱えても、いったい、どうしてそれを実現するのだろうか。教員は？教室は？設備は？どんな教育がそこで行なわれるの

だろうか、等々、次から次へと疑問が湧いてくる。もっといくつもの段階をへて、着実に、幼児教育向上の対策をととのえていく必要があるのではないか。

## 五

どのような教育制度をとるにせよ、五歳児の教育のために、今後どうしても必要な条件があると思う。簡潔に次に述べておく。

- 1 クラスの人数は三十人程度であること。
- 2 教室の広さは、いくつかの小グループに分れて活動するのに十分な空間をもつこと。また、ある程度の広さの庭をもつこと。
- 3 教科中心に時間が細分されるのではなく、遊びが中心であること。幼児の活動に十分な時間が与えられること。
- 4 教員は、幼児教育の専門の訓練を受けたものであること。小学校教育の経験のみであってはならないし、小学校教育の訓練だけでは不十分である。

以上の四点は、五歳児の教育を考えるに当って、幼児自身の成長発達のために、欠いてはならない必要条件である。

いま、論議されている五歳児の行政改革問題が、幼児のために親切なものとなるように、切に望むものである。